

## まちづくり計画論

### @京都芸術大学環境デザイン学科 (R6/12)

| 「2050年の京都に、あなたはどんな公共空間を作りたいですか」

1. 私は京都駅前の塩小路通りのビル群をデザインし直したい。京都駅は観光業が盛んな京都市にとって重要なポイントスポットであると思う。しかし今の京都駅前は普通の街中のようなビルが立ち並び、京都らしさも高く高いビルがあるため圧迫感があると感じている。せっかく京都に来てワクワクしている観光客はあの風景を見て「京都といっても意外と普通なのだな」と感じるのではないだろうか。京都タワーがあることで京都のランドマークとして駅前を表現できているとしてもそれだけだという印象で、もっと何かできるのではないかと思う。京都観光に来た人は中央口側からバスに乗って行くことが多いというのに中央口側のデザインが中途半端でインパクトに欠けていて勿体無いと思っている。そこで私が公共空間をつくるならビル群をもう少し低く建てたり無くしたりして広い広場のような空間をつくりたい。バス乗り場は低く広く広がっているのに対し、今のビル群は壁の圧が強く広がり止められているような印象がある。そのためビル群を低くしたり無くしたりすることでナチュラルにバス乗り場と京都タワー側をつなげ広い一つの駅前という一体感を出したい。また京都タワーの高さを存分に感じて楽しむためには周りの環境を低く設定することも重要だと感じていて、低い位置から見上げる楽しさや周辺環境との差を作ることによって構造物の力強さを体感できると思う。広場のイメージとしては大阪の天王寺公園のてんしぼのような広く汎用性の高い多目的な広場にしたいと思う。観光で疲れた体や精神を休められるような広場、賑やかなイベントや京都らしい表現が自由に行えるような広場、京都に住んでいる人も観光客も使いやすい親近感を感じる広場を目指したい。マルシェや季節のイベント、いろいろな種類のお店を点在させて歩きながら幅広く楽しめる広場が理想的だと思っている。ランドスケープ的な楽しさも持ち合わせているような広場であるとさらにいいと思っているためただの平坦な広場ではなくアクセントのあるランドスケープを大切にしたい。この公共空間をつくることで生まれる価値としては駅前の一体感をつくり伸びのある空気感を生み出すことができる。京都らしさを表現することができる汎用性の高い多目的な空間として時代とともに変化しながら京都のランドマークとして支える。京都に住んでいる人と観光客は精神的に隔てられているような印象があるが両者の交わる場にもなり観光地ならではの人の関係性の希薄さを和らげることを目指したい。
2. 京都は有名な古都であり、発展した観光業を持ち、多くの外国人観光客を魅了しています。2050年に向けて、私は鴨川に「過去」と「未来」を融合させた公共空間を創造したいと考えています。これにより、京都の伝統建築文化を継承しつつ、人々に未来のテクノロジーを体験してもらうことを目指します。鴨川は市民の憩いの場として、独特の自然景観を有しています。水流を境に、一方を「過去」の京都スタイル、もう一方を「未来」のテクノロジー空間としてデザインします。「過去」のエリアでは、京都の寺院建築

をテーマに木材を用いた構造を採用し、伏見稲荷大社の鳥居のような伝統的な要素を取り入れ、歴史と文化を感じられる空間を作ります。「未来」のエリアでは、環境に優しい低炭素建築材料を使用し、緑化休憩スペースや雨水収集システムを導入して持続可能な空間を創出します。さらに、スマートセンサー付きの照明やインタラクティブな情報スクリーンを設置し、天候や生態系データ、イベント情報を提供することで利便性を高めます。この公共空間がもたらす価値は、次の3つです：1.エコロジーの価値：鴨川周辺の生態系を保護し、自然と都市が共存することで持続可能な発展を促進します。2.社会的価値：市民や観光客が気軽に集い、交流を深める開かれた場を提供し、コミュニティの絆を強化します。3.経済的価値：観光客や文化活動を呼び込み、地域の活性化と経済発展を後押しします。この「自然」と「テクノロジー」、「伝統」と「未来」が融合した公共空間は、京都に新たな活力をもたらし、未来都市のモデルケースとなり、京都の魅力を最大限に引き出すでしょう。

3. 私は 2050 年の京都につくる公共空間として、枯山水を意識した大きな公園を提案します。なぜこれをつくりたいのかと言うと、現在から考えて京都もとい日本には外国人の数が急増しており、移民や観光客により学校帰りに河原町を通ると通行人の4割程は外国人であるように見えます。このままいくと半数は外国人で埋まるのではと考えます。私はこの状況をあまりよろしくは思っておりません。真の日本の良さとは、日本人がいることだと解釈しているためです。幼い頃から思いやり精神に囲まれて同じように育った日本人と違い、外国人は物に対する扱いや考えが雑なように思います。このままでは文化的で日本らしい京都の町が変わってしまうのではと警戒せざるを得ません。そこでここは日本なのだ、思いやりと侘び寂びなのだと主張する、大きな日本らしい公園があれば良いと考えました。この公園を私にとって馴染み深い河原町に作り、日本を感じたい外国人やそこを通行する日本人が景色を眺めホッと落ち着ける場所にしたいです。デザイン計画としては中央に枯山水の庭園を構え、その縁にベンチと通路を設けることで和を存分に感じ落ち着く空間にし、日本を尊べる価値あるものとなって欲しいです。
4. 京都府宇治市の六地蔵のどこかに老若男女がコミュニケーションを取り、街全体が活気に溢れる場所にしたいです。今現状として住宅街やアパートなどは多く、電車がJ地下鉄と京阪が通っている為、車以外のアクセスが可能なのに知名度が低いと感じています。なぜ活気に溢れてないかの原因としては、今はほぼ居ないヤンキーのイメージが払拭できておらず、近寄りがたいのと人と接するための空間が少ない。ただ川沿いには座る為に設置された石があるのですが、今は全く使用されてないです。整備はもちろんなのですが、ここで座って喋って良いと思わせるアイデアが必要だと考えました。川沿いの上部の斜面に合わせて段差を作り、テラスのような休憩できるスポットを作ることで利用者が増えると思います。更に近くにあるモモテラスとも結合する事でより立ち止まる人が増え、街の活気に繋がります。一箇所に留まらず今使用されて場所にフォーカスを当て、工夫を施す事により、皆が京都の景観を見て過ごすという僕のビジョンに近づくと考えました。

5. デジタル庭園(未来型公園)①どこで京都駅や観光地周辺、もしくは市内の寺社仏閣の隣接エリア。②どんな人が地元住民、観光客、学生、働く世代の人々、さらには遠隔地のバーチャル参加者。③何をして過ごせるか庭園を散策し、スマートフォンやARグラスで過去の京都の風景や文化を体感。夜にはプロジェクションマッピングを楽しむ。地元アーティストや職人によるデジタルアートの展示、鑑賞。④そこにあるハードな工夫・伝統とテクノロジーの融合歴史的景観を損なわない形で、ARやライトアップを実施。・インタラクティブ体験来場者がアプリを通じて好きなアーティスト(歴史、植物、生態系)を選びながら散策。・環境配慮型設備エネルギーは周囲の自然エネルギー(風力、太陽光)でまかなう。⑤そこから生まれる価値観・継承伝統文化を現代技術で後世に伝える大切さ。・体験観光がただ見るだけでなく、深く学ぶ楽しさに変わる。・未来志向環境を守りながら新しい文化を創造する意識。

6. 2050年の京都駅八条口における公共空間の提案私は2050年の京都駅八条口に、高速バスの待合公共空間を設けたいと考えています。この場所では、特に深夜から早朝にかけて高速バスを利用する人々を主なターゲットとし、安心して快適な空間を提供することを目的とします。利用者には、帰省や旅行、出張で夜行バスを利用する人々や、早朝に京都に到着する観光客、通勤客が含まれます。現在のバスターミナルでは冬場の寒さや混雑、快適性の欠如が課題となっています。私自身も帰省時に夜行バスを利用する際、寒さに耐えながらバスを待つ不便を経験しました。福岡の「HEARTS バスステーション博多」で体験した、シャワーや仮眠設備、広々としたインテリアを備えた快適な空間に感動した経験をもとに、京都にも同様の公共空間を作りたいと考えました。ハードの工夫・快適な待合スペース：暖色系の照明や無垢材を用いた温かみのあるデザインで、冬でも快適に過ごせる空間を提供します。・コワーキングエリア：深夜や早朝の時間帯でも作業ができるスペースを設置し、利便性を向上させます。・シャワー設備と仮眠施設：旅の疲れを癒すため、シャワールームやカプセルホテルを併設します。・カフェや軽食スペース：飲食を楽しめる施設を用意し、リラックスできる場を提供します。動線設計にも配慮し、混雑を緩和しながら、既存の在来線や市バスとの接続を強化します。駅施設とペDESTリアンデッキで連携することで、利便性をさらに高めることができます。さらに、この空間のファサードには昼夜で異なる表情を持たせます。夜間は暖色系の光で落ち着いた雰囲気、早朝や昼間には明るい色調で清潔感を演出し、特別感を生む工夫を施します。京都駅周辺の高密度な都市構造に対応するため、高層ビルの低層階を活用し、限られた土地を効率的に利用する設計とします。このような公共空間を実現し、利用者にとっての利便性や快適性が向上するだけでなく、旅に特別な体験を提供で切ると考えました。また、深夜や早朝でも人々が集い交流することで、八条口が都市間移動の重要なハブとしての役割を果たし、新たな価値を創出します。この公共空間は、単なる待合所ではなく、「京都らしさ」を感じられる特別な場所として、人々に愛される場となると考えました。

7. 動物と人、環境が共に共存できる社会を実現したい。これらを具体的に実現するために考えられるアプローチを提案します。①動物福祉の向上動物が人間社会の一部として尊重されるためには、動物福祉の向上。ペットの飼育方法の改善、動物の扱いの見直し、野生動物保護の強化動物虐待や過剰な商業利用を防ぐための法律の強化を進めること。②持続可能な環境管理環境と動物、人間の共存を支えるためには、持続可能な資源管理。自然環境を守るためには、森林伐採の抑制、野生動物の生息地保護、温暖化対策、再生可能エネルギーの推進など特に、森林の減少が動物の生態系に与える影響を考慮し、土地利用の見直しやリサイクル推進が必要です。③教育と活動動物や環境問題に対する意識を高めるためには、教育と活動です。学校教育を通じて、環境保護や動物福祉に対する理解、大人向けの普及活動を強化することが大切です。また、企業や自治体による持続可能な取り組み、社会全体の意識を変えていくこと。④エコシステムサービスエコシステムサービスとは、自然が人間にもたらす恩恵です。これらのサービスの重要性を認識し、自然環境を壊さずに利用するための技術革新や、エコツーリズムの推進など、持続可能な方法を模索すること。⑤法的枠組み動物と環境の保護に関しては、法律や国際的な協定の整備が不可欠です。国際的に環境保護や動物福祉を推進し、環境破壊や動物虐待を防止するための枠組みを提供することが重要です。⑥地域社会の役割地域コミュニティは、環境保護や動物福祉活動が重要です。地域社会が積極的に関与し、地域の動植物や自然環境の保護に取り組むことで、より身近な形での共存が実現します。これらのアプローチを組み合わせることで、動物と人、環境が共に調和した社会の実現が可能になります。それには政府、企業、市民社会が一丸となり、持続可能な未来を築くための協力が必要です。動物、人間、環境が共に共存できる社会の実現には、倫理的価値、持続可能性、共感、社会的責任など、多面的な価値が絡み合うことでより良い未来を築いていくと考えます。

8. 2050年の京都において、私が理想とする公共空間は「交流と学びの場」としての公園です。場所は、京都市中心部に近い鴨川の河川敷を活用した広大な緑地帯を想定します。この空間は、地元の住民や観光客、学生、アーティストなど、多様な人々が集い、共に過ごすことができる場所です。①どこで京都市中心部に位置する鴨川の河川敷。自然豊かな環境と、歴史的な景観が共存する場所で、アクセスの良さも魅力です。②どんな人が地域住民をはじめ、国内外からの観光客、大学生や若手クリエイター、子供たち、シニア層など、幅広い年齢層とバックグラウンドを持つ人々が集まります。特に、地元のアーティストや文化活動を行う人々が積極的に参加できるような仕組みを整えます。③何をして過ごせるかこの公共空間では、様々な活動が行われます。週末には地元の農産物を販売するマルシェや、アートワークショップ、音楽イベントが開催され、地域の文化や特産物を楽しむことができます。また、学びの場として、子供たちのための科学実験教室や、シニア向けの健康セミナーが行われ、世代を超えた交流が促進されます。自習やリモートワークをするための静かなスペースも設け、誰もが快適に過ごせる環境を提供します。④そこにあるハードの工夫公共空間には、環境に配慮した素材で作られたベンチやテーブル、緑に囲まれた開放的なシェルター、アート作品を展示できるウォールなどが設置されます。また、エコなエネルギーを利用した照明や、雨水を利用した灌水システムなども導入し、持続可能な空間を実現します。さらに、デジタル技術を活用

したインタラクティブな情報案内板を設置し、イベント情報や地域の歴史、自然環境について学べる工夫を行います。⑤そこから生まれる価値この公共空間が生み出す価値は、多様な人々の交流による文化の創造、地域経済の活性化、環境意識の向上などです。人々が集い、学び、楽しむことで、地域の結束感が強まり、住みやすい社会が形成されます。また、観光客にも魅力的なスポットとなり、京都の新しい魅力を発信する場となります。2050年の京都において、この公共空間は、過去と未来をつなぐ「人の集まる場所」として、持続可能な社会を実現する重要な要素となるでしょう。

9. 1 場所:鴨川沿いの再開発エリア京都の象徴的な鴨川沿いを選び、特に三条大橋付近に新しい公共空間を設置します。このエリアは歴史的背景と都市の中心部に位置する利便性を活かし、未来的で持続可能な都市デザインを融合させた場所です。2 どんな人が訪れるか:多様な世代と文化の交わり・地元住民(高齢者、子育て世代、若者)、国内外の観光客、アーティスト+好業家、学生や研究者、多様な人々が自然と集まり、目的を持った利用者とふらっと立ち寄る人が共存できる場とします。3 何をして過ごせるか:交流と創造の場・学び:持続可能な未来をテーマにした展示やワークショップが開催され、最新技術や文化について体験・学習できる。・リラクゼーション:川沿いで自然を感じながら過ごせる静かなエリア。交流:地元の食材を使ったカフェやマーケットで人々が会話を楽しむ。創造:アーティストやクリエイターが自由に利用できるオープンスペースやアートスタジオ。4 ハードの工夫:未来的なエコデザインと伝統の融合エネルギー自給:ソーラーパネルや川の流水発電を活用し、エネルギーを地産地消する仕組み。伝統素材の活用:何や和紙など京都の伝統工芸素材を現代的なデザインに取り入れた建築。インクルーシブデザイン:パリアフリー設計と多言語サポート、誰もが使いやすいインターフェースを備えた情報案内。・スマート空間:AIを活用した混雑管理や快適な温湿度調整、利用者のニーズに応じたサービス提供 5 そこから生まれる価値:地域と人をつなぐ未来のコミュニティこの公共空間は、「京都の過去、現在、未来を結ぶ場所」として機能します。地域住民と観光客が交流することで新しい文化やアイデアが生まれる。持続可能な生活や技術の普及を通じて未来志向のライフスタイルを発する。●地域経済の活性化:地元の職人や企業が場を活用することで新たなビジネスチャンスが生まれる。精神的な癒し:自然と調和したデザインが訪れる人々に平穏とインスピレーションを提供する 2050年の京都におけるこの公共空間は、伝統と未来をつなぐ新しい都市の「心」として、持続可能で人々の絆を深める象徴となるでしょう。

10. 2050年の京都、北白川に私は絵を描く人と絵を見る人が集まることのできる公共空間をつくりたいです。この場所は、近隣の学生たちが気軽に利用できる画廊兼カフェで、彼らの作品を発表する場にもなるようにしたいと考えています。北白川は自然が豊かで、四季折々の風景が美しいエリアです。そんな場所に、学生が自分の作品を気軽に展示でき、訪れた人々が気楽にアートを楽しめる空間があれば、多くの人を訪れるようになると思います。絵を描く人たちは、自分の作品を発表する機会が増え、訪れる人たちは、気軽にアートに触れることができます。この空間が、学生や地域の人たちの交流の場になれば良いと考えています。建物の設計には、京都らしさを取り入れた平屋を採用したいです。例えば、木材を多く使い、障子や格子を取り入れたデザインにすることで、

落ち着いた雰囲気を演出できます。また、北白川の自然を生かして、見晴らしの良い大きな窓を設置し、外の景色を楽しみながら、アートやコーヒーを楽しめるようにしたいです。さらに、ギャラリースペースとカフェスペースをゆるやかに区切ることで、どちらも気軽に楽しめる空間にしたいです。この空間ができることで、学生たちは自分の作品を多くの人に見てもらえる機会が増え、自信を持つことができると思います。また、訪れる人たちは、身近にアートを感じることで、日常に彩りを加えることができます。さらに、地域の人々と学生の交流が生まれ、北白川という場所自体の魅力も高まると考えています。2050年の京都に、このような画廊兼カフェができれば、学生たちの創作活動がより活発になり、訪れる人々にとっても新しい発見のある空間になると考えています。

11. 私は自分がよく鴨川デルタの近くで編み物をしていた体験から、2050年の京都に作りたいものは鴨川デルタに、年齢や性別を問わず誰もが集まることができる公共空間を作りたいと考えています。編み物などの手芸を通して、地域の人々が交流できる場所を提供したいです。編み物は最近ブームになっていて、若い人たちや高齢者を問わず、多くの方が興味を持っています。特に手芸は、集中しながらもお互いに会話を楽しむことができるので、交流のきっかけを作るのにぴったりだと思います。AIなどが発展する中、手作りのものは年々価値が上がっているように感じ、その価値の上昇は25年後の未来でも上がり続けていると思います。具体的には、鴨川デルタの自然豊かな場所に、編み物をするためのスペースを設けます。川床を設置し、移動式のベンチや机、必要に応じてレジャーシートの貸し出しを行います。これにより、訪れた人々が気軽にその場で編み物をしたり、手芸を楽しんだりすることができるようになります。川の音や自然の風景を感じながら、落ち着いて過ごすことができる空間です。また、編み物をするための材料や道具も貸し出すことで、誰でも気軽に参加できるようにしたいです。この場所の魅力は、何と言っても年齢や性別に関係なく、誰もが参加できるところです。編み物を通して、普段はなかなか話すことのない世代同士がコミュニケーションを取ることができます。特に、最近では高齢者と若者が編み物を通じて交流する場面が増えてきており、これが地域社会のつながりを深める大きなチャンスだと感じます。たとえば、高齢者施設から編み物が得意な人を招き、若者と一緒に作業をしながらお互いの悩みを解決するような活動ができれば、面白い結果が生まれると思います。編み物という共通の趣味を通して、年齢や世代を超えて会話が生まれることで、地域の絆はもちろんですし出町柳という観光客もくる場所での交流は幅広い効果が期待されます。また、この公共空間には、地域交流の活性化にもつながる価値があると思います。編み物を通じた交流は、特に引きこもりがちになってしまった高齢者にとっては孤立を防ぐ効果がありそうです。違う年代との会話が高齢者にとって新しい刺激になり、逆に高齢者から生活の知恵などを学ぶこともできるでしょう。このような世代間のコミュニケーションは、地域全体の活力を生み出す重要な要素だと感じます。さらに、地域住民が集まりやすい空間を作ることによって、編み物を楽しんだ後に、周辺のカフェなどで過ごす時間が増えれば、地域のお店の活性化にもつながると考えます。このように、鴨川デルタに編み物を楽しめる公共空間を作ることによって、地域の交流が生まれ、世代間の理解が深まり、地域がより温かいものになればいいなと思います。

12. 私は 2050 年にもっと、京都の道路整備をしたいと考えます。私は、もともと出身が京都ではないので、はじめて車で京都を訪れた際に、両親が、車の一時停車での路駐の多さに驚いていたことが印象的でした。京都に住んでいる人、また今住み慣れた私からすると日常ですが、客観的にみた際や、特に観光客がコロナ禍を脱し回復した今、運転しにくく危ないことが現状です。そこで、京都で行われた道路交通機関整備の成功例として、河原町の四条通があります。この例で素晴らしい点は、バス文化である京都は必ず停車する場所が必要であるという点を生かし、バス停の利用者（待ち人）と歩行者分けができていているということ。また都会ならではある駐車場がないという点でも、荷物の搬入の際のことを考えて、停車区間がきちんと設けられているということがあげられます。このように、①京都全体、特に渋滞が多い主要部や歩行者も多い観光地で、②京都で生活をする人や、観光客にとって、③住む人と観光客が両者とも安全かつ快適に過ごせるために必要なことであると感じました。また、そこには④道路幅や整備といった問題があると思いますが、京都にはすでに四条通といういい例があることを踏まえ、時間はかかるかもしれませんが、実現可能であると考えます。安全で駐車をしやすい環境づくりをもっとするというのも一つの手ではないでしょうか。⑤そこから、さらに歩行者が安全で歩きやすい環境が生まれることで、路面店の利益につながることや、少しずつですが、バスの道路交通機関をさらに整備することで住む人と観光客のバスのオーバーツーリズム問題への解決の一步になるのではないかと考えました。

13. 「2050 年の京都にあなたはどんな公共空間をつくりたいですか。」予想：AI ロボが発達していったって、一人に一つドラえもんみたいなロボットが現代でいうスマホと人のような関係以上に密接に発達していくと予想します。そんな 2050 年の京都に創りたい公共空間は「道路の三次元化から生まれる、人と人の再認識」です。現代におけるモノで例えるならば「歩行：自転車：車」を三次元に飛ばして京都の道の狭さや京都市内のグリットを上手く活用できないかな？と考え、それらを作りたいと思いました。京都市内の「観光客：舞妓さん：妖怪：地域住民・・・」などの複雑な人の構造を複数のレイヤーへ分解し、それらから道の在り方や、カタチを計画していき、交通を整備することでより効果的な移動手段の開発と、市内以外の発展、人の循環を促す。三次元的に発展する町は建築のカタチ、サービスのカタチが変化し、現在の住宅から一本の橋を伸ばすことができるかもしれない。しかし、三次元にヒエラルキーが可視化されるような都市のカタチへと発展していくことは望まない。ただ、交通が整備され、事故が減り、安全に早く目的地に行けることで生まれる行動範囲の拡大と地方の発展を目的とします。ここでいう発展とは、高層ビルが並ぶことではなく、地の歴史や風景を守りながら縮充した暮らしを担保するための仕組みを設ける事です。ハードの工夫は、現在の建築が反重力装置で浮くので、大地を密閉していたアスファルトが剥がれ、大地を自然に還すことで世界の環境問題解決への一步となることを期待する。また、電気や水道などのインフラもより整備しやすく可視化されるため、管理がしやすい。というか、もう人が何かするというよりも、機械が何かする方が早くなって、機械が救急搬送経路を走り、病院に連れて行ったり、機械が消防用経路を使って鎮火したり、どんどん機械に守られる社会になりそうで、そうなると生まれてくる、人が何かするという価値。人が何をするのかという価値。そこに機械の入る余地のない魅力はなんだろうか。と考えました。それは京都にあ

る、町家や社寺、先斗町などの通りで人が商いを行っている人文風景ではないでしょうか。人がなにかしていたり、人が人を助けていたり、私たちが普段使う「ぬくもり」とか「ほんわか」などといった抽象的な表現にこそ魅力が隠れていて、それこそが価値として私たちを本質的な意味で社会の構造の中にもいい存在だと守ってくれる気がします。2050年の公共空間は今以上に「人と人との温もり」で溢れた暖かい公共空間でいて欲しいと願います。

14. 私は、京都駅周辺の都市エリアに緑豊かな複合商業施設を作りたいです。都市の中心地である京都駅周辺は、観光地へのアクセスが良く地元住民や観光客が集まります。この場所に緑豊かな複合商業施設を設置し、都市生活の中で自然と触れ合う機会を提供します。2050年はもっと都市化が進み、自然を感じる場所が少なくなるのではないかと思います。複合商業施設で自然を感じる事ができればいいと考えます。この空間は、観光客だけでなく近隣で働くビジネスパーソンや家族連れ、地元の方々も対象とします。2050年は少子高齢化が今より進んでいると思うので、小さな子供からお年寄りまでが楽しめる空間になればいいと思います。施設内には、地元産品を扱うショップや飲食店、自然に関する体験型アトラクションを設置します。また、屋上や館内に設置された庭園では、リラクゼーションやイベントが楽しめます。様々なところにベンチやテーブルを置き、くつろいだり勉強したりと、足を運んだ人が自分で考えて使えるような空間になればいいです。また、環境保全やサステナブルライフをテーマとしたワークショップや展示を定期的で開催し、子供から大人まで、多くの方が自然について考えることができる施設にしたいです。ハード面の工夫として、建物全体に自然を取り入れたデザインを採用します。例えば、壁面緑化や屋上庭園、階ごとにテーマの異なる植物エリアを設置したいです。また、建物内には自然光を取り込む構造を採用し、環境について考えた建築技術を活用し、さらに、館内の冷暖房や電気などは、自然エネルギーを効率的に取り入れる仕組みを導入したらいいのではないかと考えます。この施設は、自然と調和した都市空間を実現し、訪れる人々に心地よい体験を提供できると思います。さらに、地元の産業や文化の発信拠点としての役割も果たし、観光客や地元の人々の交流の場としても活用できる場になると思います。

15. ①どこで私がつくりたい公共空間は、京都の「裏側」にあたる場所で、具体的には町屋の裏手や細い路地の隣接地です。この場所は、現代では観光地などの発展から取り残されがちな場所でありながら、京都の歴史と深くつながっていて、コミュニティのつながりも強い場所です。これらの空間をデザインすることで、京都の隠れた魅力を引き出したいと考えています。②どんな人がこの空間は、地域住民や京都なので自転車で通勤中の学生や会社員、観光で訪れる外国人、散歩中の人々など、子供から高齢者まで幅広い層が気軽に立ち寄れる場所を考えています。誰でも安心して過ごせる雰囲気をつくり、世代や国籍を超えた交流の場にします。③何をして過ごせるかこの公共空間では以下のようなことが実施され、体験できます。：週1回(平日や休日などは不定期)のマルシェや屋台：住民が運営することで地元で採れた野菜や地元の料理を提供し、住民同士のつながりや、あまり関係性の良くない住民と外国人観光客との関係を深めるきっかけになります。季節ごとのイベント：クリスマスやお盆などに合わせたイルミネーションや伝

統的な祭りを行い、地域の活性化につなげます。休憩や散歩：椅子、ベンチや芝生などで読書やおしゃべり、リラックスする時間を過ごすことができます。文化体験：地域の伝統工芸や料理を体験できるワークショップの開催を予定しています。④そこにあるハードの工夫町屋と調和したデザイン：町屋の景観を損なわない木材や瓦などの日本の伝統的な材を使用し、地域特有の空間を作り出します。落ち着いた照明：間接照明やランタン型の照明を使い、夜でも安心して歩ける場所をつくり、これにより、暗くて怖いというイメージをなくします。可動式の出店の配置：屋台やマルシェ用のスペースを簡単に設置・撤去できるデザインを考え、通常の日とイベントがある日とで使い方を分けられるようにする。防災機能の工夫：避難時に役立つ水道や緊急備蓄を準備し、地域の安心感を手に入れます。緑化：小さな庭や植栽を配置し、都会的な空間の中に自然に触れることができる空間を作り出します。⑤そこから生まれる価値この公共空間からは以下のような価値が生まれると考えます：地域のつながり：住民同士や観光客との交流が増えて、地域コミュニティが活性化します。観光地の増加：観光客が京都の新たな一面を発見し、観光が分散されること京都の観光客による混雑が緩和されます。町並みに対する意識と地域経済の両立：町屋の景観を活かした空間を作っていくことが収益にもつながっていくため、地域住民の景観に対する意識を高めることができる。明るい魅力的な路地裏：暗くて怖いとされる路地裏が、明るく温かい憩いの場に変化します。文化継承：屋台やマルシェ、ワークショップ、イベントなどを通じて京都の伝統が次の世代へと受け継がれていきます。2050年、京都は歴史的な美しさと、現代の便利さを併せ持った、いろいろな人が楽しめる魅力的な都市として発展していくと考えます。その中で、この公共空間は京都の進展の役割を担うと考えています。

16. 河原町や先斗町の、飲み屋が並ぶ通り。夜はキャッチや酔っ払いの他、ガラの悪い兄やん姉やんがその辺でタバコ吸って酒飲んで過ごしている。ガラの悪いのは恐らく人相や服装のせいだから仕方ないとして、恐らく路地であったり階段であったり、とにかく至る所で缶のアルコールを開けて騒いでいるのが良くない印象を与えているのだと思う。そして、こういう人種はどんな規制をしても何かしら言い訳を考えてそこに続けるのだろうか。ならば、逆にそこら中に簡易テーブルを置いてしまえばいいのでは無いだろうか。スペインなどの賑わっている通りの多くには歩道まで飛び出して外のカウンター席があったり、路上でも上品に食べたり飲んだりしている。京都の街でも、規制を増やすのでは無くむしろオープンにするのはどうでしょう。メインストリートには出さないとして、1本メインストリートから外れた通りに飲食店の協力も得て立食用のテーブルを増やし「その辺で飲み食いしてるガラの悪さ」を解消し、店の敷居をある程度下げ観光客なども取り入れ通り全体の売上にも一役買うプランを提案する。

17. ①京都の市内の中心地で複合した公共施設を作りたいと考えています。公園の中に図書館と植物園や温室を設け様々な体験ができるような場所にします。公園には緑を多く催し、四季に応じて様々なイベントが行えるようにし、②周囲に来る観光客や、周囲で働いている社会人の人たちが心安らぐ都会の中の自然を作り出すことが目的としています。③本を読むのはもちろん、ピクニックやイベントも行うことができます。また、図書館は京都ならではの神社のようなビジュアルの図書館にすることで本が好きな方は

もちろん一つの観光スポットのような場所にすることが狙いです。図書館の内装は④畳や茶室の読書スペースを設けゆっくりと時間が流れるような空間にすることが目的です。温室や植物園は視覚、嗅覚、触覚の三つを満たしてくれる目に優しい心が温まる空間を提供します。⑤この三つが合わさった複合公共施設は都会の中にある休む場所として活用していき、その場所に訪れる人の笑顔を増やしたり、様々なニーズを満たす場所として成り立っていけば良いなと考えました。

18. 現在の京都の問題点として、観光客と京都市民（京都の学生、京都で働く人）の関係性があげられると考えた。観光客がいることで成り立っている京都だが、特に秋の紅葉シーズンや、祇園祭の時期などは、市バスや電車の混雑、観光客の集中などで市民の生活に影響が出ている。今後、観光客と京都市民が調和して共存していくためには、両者をうまく分けた空間が必要なのではないかと考える。そこで私は観光客の集中を緩和するために、京都全域を活用した分散型観光を提案する。まず一つ目に、地域ごとのテーマ設定だ。各エリアに特化したテーマ（伝統工芸、自然体験、現代アートなど）を設定し、そのテーマに添った公共空間を作り、イベントを行う。具体的には、清水焼が盛んな東山区では焼き物のワークショップを行うことや、比叡山や銀閣寺などのある左京区では歴史と自然を感じることができ空間を作ることや、ツアーを計画したいと考えている。また、最も提案したいこととしては、市バスと観光バスの分離である。観光客専用のバスを運行し、市民の生活交通と分けることで、市民のストレスも減り、市バスの運行もよりスムーズになると思う。

19. わたしが 2050 年の京都に作りたい公共空間は、駅構内や商業施設の一角に子供から大人、妊婦さんや体の不自由な方、など自由に使える畳の休憩スペースをつくりたいです。なぜ駅構内や商業施設の中に畳なのかというと、駅構内にはベンチや休憩スペースのような公共空間がなく、待ち合わせする際に建って待っている人がかなり多く、実際に私も友達と駅の中で待ち合わせの時はなるべくベンチを探して座って待ちたいタイプですが、駅の中のベンチの数はかなり限られている且つ私のような考えの人が多いため、常に座っていて開いてない状態が多いので、待ち合わせしやすいようにという考えと、商業施設は人が多く人混みが苦手な人に配慮した休憩スペースとしても活用できると思いました。また駅構内と商業施設に共通す「人」ですが、小さい子供から年配の方まで沢山の人が利用する場所で、子供と来ている人や妊婦さん、体の不自由な人も少し座れる場所があれば落ち着けるし、疲れも取れると思ったからです。2050 年ともなれば、ハイテクでスタイリッシュなデザイン性の高いものが多い内装になっているとは思いますが、なぜ畳の休憩スペースにするのかというと、最近の住宅や賃貸の物件でも畳の部屋は少なく、フローリングが増えています。フローリングのメリットとして掃除のしやすさ、耐久性が高い、高級感があるなどがあり、現代の人にはフローリングの方が馴染みがあり、畳の存在を遠く感じてしまうのではないかと考えました。なので日本の「和」を象徴できる畳を選ぶことで日本のイメージを残しつつ、現在のような外国人観光客が多ければ、日本に来たという実感ができるものが近くにあれば喜んでもらえるのだと思いました。ハードの工夫としては、小さい商業施設でも大きな商業施設でも必ず小さなデッドスペースがあると思うので、そのスペースを活用できると考えました。

この畳の空間から得られる価値として、利用者の心身の疲労回復と混雑する人混みの解消に繋がることだと思います。

20. 2050年の京都において、「移動する公共空間」という新しいコンセプトの空間を提案します。この空間は、モビリティの進化を活かした移動型の公共施設で、住民や観光客が多様な活動を楽しめる場として機能します。さらに、現在問題となっている公共交通機関の混雑についても緩和できると考えました。この空間を利用するのは、地元の住民や観光客、学生、ビジネスパーソン、さらには高齢者や子ども連れの家族など、多様な背景を持つ人々です。例えば、仕事帰りのビジネスパーソンがリラックスするために立ち寄り、観光客が移動中に地域の文化や歴史を感じることができます。また、地元の子どもたちが遊び場として利用したり、高齢者が交流の場として活用したりする姿も見られるでしょう。移動する公共空間では、リラックスできるカフェスペース、地域の歴史や文化を体験できるインタラクティブ展示、働きながら移動できるコワーキングスペースなど、多機能な設備が整っています。また、季節ごとのイベントや地域特産品の販売も行われ、人々が移動中でも京都の魅力を感じることができます。この空間は次世代の自動走行車両を基盤としています。車両は静音でエネルギー効率の良い設計になっており、車内は柔らかな間接照明や天然素材のインテリアで居心地の良い環境が整っています。車両の一部はモジュール化されており、カフェ、展示室、リラクゼーションスペースなどに用途を切り替えられる仕組みです。また、車両間をつなぐシステムにより、複数の空間を自由に行き来できるようになっています。移動する公共空間は、ただの移動手段ではなく、新しい形の「出会い」と「学び」の場を提供します。異なる背景を持つ人々が偶然出会い、交流することで、新たなコミュニティや価値観が生まれるきっかけとなるでしょう。また、移動中に地域の文化や自然と触れ合えることで、京都の魅力を再発見する機会を提供します。この空間は、効率的な移動手段であると同時に、地域の文化や人々のつながりを深める役割を果たすのです。2050年の京都における「移動する公共空間」は、人々の生活や観光のスタイルを豊かにし、持続可能な都市づくりに寄与する新しい公共空間の形となると考えました。

21. 私は鴨川で鴨を見ながら散歩をするのがマイブームです。その為、京都の豊かな自然を守るために、鴨川や嵐山のような自然と都市が共生する公共空間を広げる事ができたら幸せだなと思います。動物たちの生息地を守りながら、都市の中心からもアクセスしやすい湯所が理想です。例えば、嵐山の竹林や鴨川沿いのエリアを中心に、動物たちが安全に過ごせるスペースと市民が共存できるよう、動物たちの生息地に配慮しつつ設計し、特に野鳥観察や小動物との触れ合いができるエリアを作ります。また、飼い主とペットと一緒に楽しめるドッグランや、ペットと一緒に参加できるイベントも開催し、動物に優しい社会を育む機会を提供するのも有効的だと思います。この公共空間では、動物に関心のある市民や観光客が集まり、特に家族連れや動物好きな人々が中心となるでしょう。また、環境保護に関心のある活動家や研究者も訪れる湯となり、動物福祉や自然環境保護について学び、実践できる湯所となります。地元の学校とも連携し、子どもたちに動物や自然への愛情を育む湯としても利用されることを目指します。週末になると、地元のバザーが開かれ、環境教育の湯として、動物福祉や生態系の大切さを学べ

るワークショップや展示も行われると、より指の活性化に繋がっていくでしょう。そして、設計の方では、環境に優しい素材を使用し、無害な建築材料やリサイクル可能な資源を選びます。動物たちが安全に過ごせるよう、事故を防ぐために歩行者と動物の動線を明確に分けます。また、動物たちの生態系を守るために、緑地帯を多く取り入れ、植生を活かした自然な景観を作り出します。この空間から生まれる価値は、動物と人々が共に尊重し合う新しい形の共生です。動物に優しい公共空間は、自然環境を守りながら、人々にエコロジーの大切さを伝える重要な役割を果たすでしょう。

22. 「街角の森：人混みからの小さな逃避」私は、2050年の京都に「人混みが苦手な人」のためのリフレッシュ空間をつくりたいと考えています。具体的には、河原町や出町柳のように人が多く集まる街中に、半屋外の簡易的な森を演出する空間を設けます。この空間では、観葉植物を集合させ、自然を感じられる環境をつくることで、人々がふと足を止められる場所を提供します。この空間は、休日の混雑した時間帯に使用する計画し、建物内ではなく、街中の道の一角にオープンでアクセスしやすい形態を採用し、都市部では得られにくい「自然の感覚」を提供します。目的地というよりも、人混みで疲れた時に立ち寄りやすい「ついで場所」として機能し、休憩や静かな会話、そして新たなコミュニケーションを生む場になると考えます。この空間から生まれる価値は、「都会で忘れられがちな自然とのつながり」です。簡易的な森であっても、訪れた人々は心地よさを感じ、リフレッシュできると考え、また、京都という歴史と文化が深い街において、自然と調和した空間は新たな魅力となり、多くの人に「自然と都会の共存」とともに喋るというコミュニケーションではなく居るというコミュニケーションから「様々な層のコミュニケーション」の場所を提供します。

23. 私は春から働く予定の事務所でアルバイトをしているが、昼ごはんを食べる場所に困っている。弁当を持参しても事務所内では食べづらいし、毎日外食をするのも懐事情が心配だ。外で弁当を食べたくても、ベンチのない公園、屋根のないボロボロのベンチばかりで全く現実的ではない。子供のための公園で大人が何かしている光景はそれだけで好奇の目にさらされて居心地が悪いし、夏は日差しに悩まされ冬は凍えながら食事をするのも不愉快なので、結局事務所内のエアコンがなく人気の少ない場所で立ったまま昼食をとることもある。大人が公園で快適に昼ごはんを食べられる場所があればいいのにと思っている。外で、大人が、一人でご飯を食べられる場所をつくりたい。公園の一角にそんな場所を作ると仮定して、どんな工夫をすればいいのか考えてみる。まずは通行人からの視線を気にせず済むように、空間を仕切る。円形や多角形状など、通行人の視線をある程度避けて内側に開くような形状がいいのではないかと。しかし公共において密閉性が高い空間は、子供や女性が連れ込まれても見つけてもらえなくなるリスクがあるため、足元は開ける、壁は透ける素材にするなどの工夫をしなければならない。また、従来の藤棚やルーバー状の屋根では雨や日差しを凌ぐには不十分であるため、快適に過ごせるように屋根を設ける。雨天でも足元を気にせず過ごせるように段差をつけるなど、水はけにも気を配る必要がある。食事をする事が前提なので机と椅子があることを前提に、それらは公園にありがちな木材ではなく拭き掃除のしやすいメラミン加工のものが良い。複数人での食事にも使えるように、十人ほどで座れる長椅子と、一人がけの可動

の椅子を点在させるなどインテリア面での配慮もする。普段は大人がゆっくりと食事ができる半屋外スペースだが、非日常の場所として地域のイベントなどに活用すれば「天候に左右されやすいこと」を解決することもできる。椅子と机があるので屋台が出るイベントにはイートスペースとして活躍するし、販売者側がブースにすることもできる。

24. 街や地域で、住人やお出かけで来た人、観光客が、地域や個人の商品を買えるような店で買い物ができる場を作りたいと思います。そのために、法で大規模小売店の規制を強化して、大型の商業施設やチェーン店の占有面積を減らすことで、全国に流通する商品や安く大量に売られるものより、地元や個人で作られる良いものを買ってもらえる機会を増やしたら良いと思います。大型店を減らした上で、開発として新しい建物をどんどん作るのではなく、町家や空き家を生活の中で使ってもらえる店舗として活用していくべきで、商店街に若者向けの店を入れたりしながら、個人経営の店が増え、地域の生活の基盤となって行けたらいいなと思います。また、一つ大きな商業施設を建てて満足する今の建築と商業の結びつきのあり方を変えていくべきだと思います。最近、どこに行っても大体同じものが売られていて面白くないと感じることがよくあります。梅田には大型商業施設が多くありますが、結局似たり寄ったりの全国どこでも買えるような店しか入っておらず、すぐ飽きます。しかも、大量生産大量消費を助長するようなファストファッションがほとんどです。しかし、堀江などエリアによっては小さなレストランやカフェ、雑貨屋や古着屋が多く、個性ある街となっているので、京都らしい町家を店として使ってもらい、店の種類と個性がある街にしていけたらと思います。

25. 私は、京都の下鴨（高野川と賀茂川、北大路の間の三角の空間）に 47 都道府県の伝統や食べ物などが揃っている空間をつくりたいです。下鴨を選んだ理由は、鴨川には若い人からお年寄りまで幅広い年代の人、性別や国籍関係なくたくさんの方がいるからです。また、川や木々など京都の自然を感じられる開放的な空間だからです。京都にはたくさん大学があり、様々な都道府県から学生が来ています。私も大学で徳島から京都に出てきましたが、私は地元が好きなのでよく地元に戻りたくなります。私のように地元に戻りたいという気持ちや地元を感じたいという人がたくさんいると思います。そんな人達のために地元を感じられる空間をつくりたいと思いました。また、地元だけでなく行ったことがない県などの伝統や食べ物、有名なものなどを知ることができるきっかけになると思います。まず、緑を配置し、公園のような開放的な自然豊かな空間にします。そこに 47 個の建物を配置します。その建物の中には各県の写真や伝統工芸などを展示し、地元の音楽を流し、ショップや飲食スペースを配置します。建物をガラス張りや扉を多くしオープンにすることで公園と一体化し、開放的な空間になると思います。屋外にもベンチやテーブルを置き、たくさんの方が休める空間をつくりたいです。普段の生活での疲れを癒しに変えられるような空間にします。また、育ってきた環境が違う人達との交流もでき、コミュニティが増え、新しい考えや知識を身につけることができます。人それぞれ地元があり、地元で過ごした思い出も様々です。そういった思い出を大切に、他者と共有することで自分の中での思い出の価値や地元の価値も高まります。また、47 都道府県全て違った特徴があり、それをこれからも大切にしていこうためにも大切な公共空間になると思います。その空間が一つのまちになれば良いなと思います。

26. 京都の哲学の道で芸術学生が、イラストを自由に書いたり制作をしたりと制作活動ができ、それをもとに地域のかたと交流ができる公共空間学生と地域交流の場所がコロナ以降減っていき、学生の活動に対する地域の意識が変化しているように感じる。そこで、学生が音楽やイラストを描く専用の空間を作り、その周りにベンチなどの普段使いできる空間を作成。毎日同じ人が来るわけではなく、25年かけてさまざまな人が来るため、学生が卒業後もその場所に集まり地域の方やその時の学生と交流ができる。地域の方が学生を理解することによって、学生の行動の場所や地域活性化活動と一緒に活動できたり、学生が地域のことを理解することによって、デザインがどのような面で役にたつのか、今の社会が何を求めているのか、学生の外での経験を得ることができる。交流や活動をメインにしたコミュニティスペースが増えることを望んでいます。

27. 1 どこで 2050 年の京都では、歴史的な町並みと自然環境が調和する地域、特に東山周辺や鴨川沿いの公園エリアに新たな公共空間を設けたいと考えます。東山は古都としての魅力を持ちながら、自然豊かな環境と近代的な施設を共存させることができる場所です。特に観光地としての人気が高いため、観光客と地元住民が共に過ごすことのできる空間が求められます。2 どんな人がこの公共空間は、観光客、地元住民、学生、外国からの滞在者、障害者を含む全ての市民をターゲットにします。特に、地元住民と観光客が交流する場として、異なる文化や背景を持つ人々が自由に集まれるスペースにしたいです。また、多世代交流を促進するため、子どもから高齢者まで幅広い年代が共に過ごすことができる場を作ります。3 何をして過ごせるかこの空間では、カフェや飲食店、アートギャラリー、ワークショップの開催、自然散策、ピクニックなど、さまざまな活動ができる場を提供します。観光客には京都の伝統的な文化を学べる体験型プログラムを提供し、地元住民にはコミュニティ活動や多世代交流の場として活用してもらいます。例えば、地域イベントやクラフトマーケット、音楽やダンスのパフォーマンスなどが定期的で開催され、観光客と住民が共に楽しむことができる空間になります。4 そこにあるハードの工夫ハード面では、伝統的な京町家のデザインを取り入れ、景観を損なうことなくモダンな設備を整えます。例えば、環境に配慮した再生可能エネルギーを使った電力供給や雨水の再利用システムを導入し、持続可能な都市を目指します。都市空間に緑化を積極的に取り入れ、都市のヒートアイランド現象を抑制し、快適な空間を作り出します。また、バリアフリー設計を徹底し、全ての人々がアクセスしやすいようにします。5 そこから生まれる価値この公共空間からは、観光と地域の調和が生まれます。観光地でありながら、地域住民との融合が進むことで、観光業が地域経済を支える一方で、地域社会の活性化にも貢献できます。また、共創の場として、地域住民が自分たちの文化や歴史を共有し、観光客との交流を深めることができます。このような価値が生まれることで、京都がただの観光地ではなく、地域コミュニティが活性化した持続可能な都市に進化していくことができると考えます。以上のように、2050年の京都には、伝統を守りつつ新しい価値が生まれる公共空間を作り、京都が未来志向の都市として、文化や地域のつながりを大切にしたい場所になることを目指します。

28. 私は 2050 年の京都、鴨川沿いの東山地区に、多様な人々が集う公共空間を提案します。この空間は、地域住民、観光客、アーティスト、学生などが利用でき、アート展示や伝統文化のワークショップ、庭園散策など多彩な活動を楽しめる場です。芸術を自然と共に楽しみ、ピクニックやバーベキュー、スポーツを楽しめる街にしたいです。設計には、京都の伝統建築と現代技術を融合し、木造建築とガラス素材を組み合わせ、可動式の家具や壁で用途に応じた柔軟性を持たせます。シンプルに洗練されたデザインを用い、ソーラーパネルや雨水回収システムを採用したサステナブル設計やバリアフリー構造を採用し、環境に優しく、誰もが快適に過ごせる空間を目指します。これからの世代へも安心して利用してもらえるような洗練されたデザインの休憩場なども欲しいです。この公共空間は、地域の活性化や伝統文化の継承、観光の多様化、環境意識の向上を促進する「文化の交差点」として機能し、京都の歴史と未来をつなぐ新たな価値を創出します。
29. 対象敷地は二条駅の近くを想定します。二条駅近くは河原町や嵐山などの観光地よりはやや落ち着いた観光地で昔ながら雰囲気とおしゃれな飲食店が多くあります。そこに京都に住んでいる人々を主な対象とし、公共空間をつくりたいと考えます。公共空間の用途はフリースペースとしてなんでも利用できるような室内空間を計画します。すでに二条公園などの公園はあり、自然と触れ合う場所はたくさんあるので、雨の日でも利用できる室内空間は需要があると考えました。ハード面について室内空間の施設を作る場合京都では京都市建築基準条例が定められているため、配慮が必要です。そこで街と調和された、デザインで公共施設をつくるのが大切です。また自然も多いところが京都の魅力の一つと考え、自然に囲まれた秘密基地のような空間を作りたいです。このような室内公共空間を二条駅につくることで、次どこに行こうか考える場所ができ、結果さらなる街の活性化が望まれると考えます。そして、子どもから高齢者まで多世代が利用できる場を提供することで、孤立防止や健康増進にも寄与します。また、学習や仕事に利用できるスペースとして機能すれば、地域の生産性向上や学びの場の充実が期待されます。さらに、イベント開催や地域文化の発信拠点にもなり、地域経済の活性化にもつながります。
30. 私は街中に緑地ができてみんながゆっくりできる空間、「都市公園」がもっと増えて欲しいと思いました。木屋町通りの中にも少しありますがもっと大きいのがあればいいなと思いました。大阪にも梅田にできたグラングリーンのような都会の中にみどりの空間があることはとてもいい空間、環境を生み出してくれると思います。まず、「みどり」の良さを伝えさせていただきます。「みどり」・みどりで過ごす、活動することで、心理的、身体的な健康が得ることができます。・ひらめきや創造的な発想が得られることができます。次に「都市公園」について都市公園があることによって街で歩き疲れた一休みとして使うことができます。観光客が多い河原町ではお店の混雑も少しは緩和できるとも思います。また、一休みできることによって疲れて帰ろうという人の気持ちを和らげてくれます。ただみどり一面の空間をおいても利益を売ることはできません。そこで、キッチンカーや popup 展をおいたりイベントを開催するなど楽しめる空間をおき利益もつけれるような空間ができます。

31. 私が描く 2050 年の京都の公共空間は「バスの使い方」です。観光客以外にも通勤・通学をしている人たちと色々な人が利用します。普段はバスに乗らないのですが、久しぶりに乗った際に人が多すぎて何駅も乗れないことがあって人の多さに流石に驚きました。バスも便利ですが、なんで電車を通さないのだろうなと考えました。確かにお金と時間もたくさんかかるし、様々な交通機関の見直しが必要なこともあります。これから何十年も京都にはたくさんの観光客がきてくれると思うし、作った損はないなと思います。しかし、また別にバスの本数を増やすことも考えてみました。それも電車よりはコスト的に大丈夫だと思うし、結構有力かなと思います。それと同時に観光客専用と通勤通学専用に分けてみたら？とも考えました。分け方としては学生証などの申請をしてバスをもらうことです。割合的にどっちかにかたよるのかなと思いましたが、普段使わないのでわかりません。

32. 「すべての世代が学び直せる生涯学習都市」私が大学入学を機に京都へ移り住んで一番良かったことは、京都の魅力的な建築資源を背景とした講義や展示といった文化・教育サービスが充実していることです。学生の街として知られる京都にある知的財産を、よりすべての年齢の人々が受け取れるよう拡充し、実際の社会活動へと繋げられる教育プログラムを提供できる公共空間をつくりたいです。今の日本では高校卒業直後に大学へ進学し、卒業後すぐに就職するという画一的なルートが主流であり、学び直しの機会が十分には提供されていません。このあり方は、知的好奇心を持つ人々にとっても、新たなキャリアを築きたい人々にとっても障壁となっています。2050 年の京都ではこの社会のあり方を率先して変えていく、「すべての世代が学び直せる生涯学習都市」として、年齢や背景を問わず、誰もが学び直しのできる生き方を実現させてほしいです。私は大学の図書館によく行きますが、平日よりも土日の図書館の雰囲気が好きです。それは通信課程の学生が土日になると多く訪れ、様々な年齢の人が机に向かい読書や作業をしている姿を目にするからです。私も大学に入る前は介護福祉士として働いていたのですが、全く異なる建築分野に興味をもったため通学課程で学生生活をしています。しかし現役学生の中には、明確に勉強したいものがないにも関わらず、ただ高校卒業後に大学へ行くことが当たり前だから大学進学している人が多くいます。そのような学生にとっては大学は就職予備校としかかなりえず、大学で学ぶ意味と然るべき学びのタイミングがその人の人生から奪われていると感じます。人生100年時代を迎え、大人の学び直しを掲げる大学も見かけるようになりましたが、現状ではキャリアアップの側面が強く、全く新しいことを好きなタイミングで学び始めようとする人を受け入れる社会にはなっていません。そんな中で、京都が本当の意味での学び直しの間と実社会に繋がれる仕組みをつくっていければ、高校卒業の後に取り敢えず大学進学をするという常識を変え、人生100年時代の文化都市としてよりふさわしいロールモデルになると思います。

33. 2050 年の京都において、鴨川沿いの四条大橋から五条大橋付近に、VR や AR などのデジタル技術を活用した公共空間を提案したい。なぜなら、「京都＝古き良き」というイメージと、デジタル技術という「最先端」を融合させると面白いであると考えたからだ。また、この場所は、自然と都市が交わる京都の象徴的なエリアであり、国内外の観光客、地元住民など、多様な人々が利用できる場所である。そこに訪れた人々は、VR を活用

して過去の京都の街並みや文化を再現した「タイムスリップ体験」を楽しみ、ARガイドを通じて建造物や自然の見どころを視覚的にわかりやすく知れるだろう。また、プロジェクションマッピングやARアートインスタレーションを活用した季節ごとのデジタルイベントが行われ、家族連れや若年層にも楽しむことが出来るだろう。空間には、最新技術を体験できる場所を設け、ソーラーパネル付きベンチや雨水利用をする。さらに、ユニバーサルデザインを採用し、スロープや広い歩道、音声ガイドなど、誰もが快適に利用できるようにハード面での工夫をします。この空間は、伝統と先端技術が融合する場として、京都の新たな魅力を見出し、人々が歴史や文化、自然への理解を深めるきっかけづくりになるだろう。加えて、観光客には忘れられない体験を、地元住民には新たな場所としての魅力を付加できるだろう。私が考えた2050年の京都は伝統と先端技術を組み合わせた公共空間が出来上がっているのではないのかと考えた。

34. 私が考える公共空間は、最先端と昔の雰囲気が出た公共空間で、場所として考えたいのは河原町周辺です。私は公園で鬼ごっこやドッジボールなどをして育ってきました。最近ではボール遊びができる公園なども減ってきています。高齢者が増えたのもあり、ボールが危ないことからの禁止だと私は思います。また、公園で思うように遊べないせいで家でゲームをする子が増えたと思います。そこで私が考えるのは最先端を混ぜた大型の公園です。ざっくり言うとゲームができる公園です。ゲーム機が揃っていて、仲良く遊べるように予約出来たり、何十人でも遊べるようにします。時間制限や営業時間も考えます。子どもが遊びすぎないようにです。外でゲームをするだけでは家でやればいいとなってしまいます。ゲームをする順番を待ったりする間に遊具でも遊べるように、ブランコやシーソーなどの遊具も置きます。河原町あたりで夜スケートボードを滑る人をよく見かけ、それもまた危ないと思っているので、スケートボードができるスペースや鉄ボスなどの運動器具も揃えたいです。ただ遊具を置くだけでは何も変わらず危ないと言われる可能性もあるので、車の危険察知のような機能を取り入れたいです。そうすることで、大人から子どもまで仲良く安全に遊べると思います。また、周辺で働く大人の方のために、少し古いゲーム機などを置き、子どもから大人までコミュニケーションが取れるような場所を目指します。さすがに不審者が出て危なくなりそうなので、警備員を配置したいです。

35. 2050年の京都に新たな公共空間として提案するのは、「未来の茶室」です。①どこで京都の中心部、四条河原町を考えます。歴史があり今でも全ての世代が愛するこの場所は、古い町並みと新しい公共空間が共存できる理想的な場所と考えました。②どんな人が全ての年齢の人、そして地域の住民だけでなく外国人観光客も含めた多様な人々。文化や国籍を超えた交流ができるのではと思いました。③何をして過ごせるかこの茶室では、伝統的な茶道だけでなく、現代アートやテクノロジーを組み合わせると面白いのではと思いました。例えば、AIが作る詩 vs 人間の作る詩はどちらが面白いのかなどのゲームも面白そうです。また、季節ごとのイベントやワークショップも開催して地域に根付くイベントになればいいなとおもいます。④そこにあるハードの工夫建築は茶室の形式を軸としながら、太陽光パネルなどを活用することで現代と歴史のギャップが面白いのではないかと考えました。また、昔からある畳からカフェ見たいな椅子があっても面白そう

です。⑤そこから生まれる価値この公共空間は、京都の伝統と未来を繋ぐ場所。文化の交流の場として、地域コミュニティや観光の価値を改めて再確認できると思います。

36. ①どこで私は「東山の麓」に公共空間を設けたいと考えました。東山は、京都らしい風景が広がる一方で、観光地としての負担が大きく、地域住民と観光客の共存が課題となっています。最近では東山エリアの住民の高齢化が進み、あまり外に出ないが観光客から与えられるストレスも増えているようで、ゴミ問題やゲストハウスホテルなどからの騒音問題も問題となっています。このエリアに新たな公共空間を整備することで、地元の生活と観光客との共存が鮮やかになればいいです。②どんな人がこの空間は、多様な人々が利用できることを目指します。地元住民が日常的に集い、観光客が京都の文化を深く体験できる場とします。また、学生やアーティストが多い京都ならではの創作活動や学びを深める場所としても活用して欲しいと思います。さらに、家族連れや高齢者、外国人観光客も安心して楽しめるユニバーサルデザインを採用できればと思います。③何をして過ごせるかこの空間では、地元の人々が交流し、地域の運動会、伝統文化のワークショップやマーケット、マルシェなどが定期的開催されます。観光客は和菓子作りや茶道の体験ができ、学生やアーティストはオープンスタジオで作品を発表でき今後の研究などに役立つ空間を作りたいです。また、緑地や水辺でのんびりと過ごしたり、子どもたちが自然遊びを楽しむこともできます。④そこにあるハードの工夫空間設計には以下の工夫を取り入れます：・景観との調和：京都の町家や庭園の要素を取り入れた建築デザインで、伝統と現代性を融合させる。・自然との一体感：東山の自然を活かした緑地帯や水辺を整備し、四季折々の風景が楽しめる空間を作る。・環境配慮型の設備：太陽光発電や雨水利用システムを採用し、持続可能な設計を実現。・デジタルインフラ：観光案内や歴史的情報を多言語で提供するスマートサインやAR体験を導入。個人的にはこのAR体験の部分には特に力を入れて空間設計していけたらいいなと思います。未来の話になるので架空にはなりますが…⑤そこから生まれる価値この公共空間は、地域住民と観光客の橋渡し役となり、双方が共存する新しい形のコミュニティを創出します。京都らしい文化を深く体験できるだけでなく、地元の魅力を再発見する場ともなるでしょう。さらに、持続可能なデザインと多様性への配慮は、次世代の公共空間のモデルとして国内外に発信される可能性があります。このようなものをとおして2050年の京都をより豊かにする空間を目指します。

37. コロナ禍も終わり、世界各国から来る観光客も戻ってきたことにより、京都は以前の活気を取り戻しつつある。しかしどうだろうか、昨今のニュースやSNSでは、外国人による身勝手な行動により日本の治安が脅かされているものばかりである。特にポイ捨て問題については深刻で、コロナ禍前後では街で見かけるゴミの量が圧倒的に増えてしまっている。今はまだ清掃員の方々が頑張ってくれているお陰で目立ってはいないが、その状況も長くは続かないだろう。これからも2050年になっても愛される京都を作るためには、観光客についてそういったマナーを訴えかけるスペースを設けていくべきではないだろうか。そのために、私は「京都駅周辺」に日本のマナーや、ゴミの扱い方について学ぶ公共空間を設けたいと考えている。駅周辺は観光客の流入が多く、初めて京都を訪れる人々が必ず通る場所であり、インパクトを与える場として最適である。この空間

には、ゴミを捨てる行為が視覚的にどのように環境を汚染するのかを示すアート作品や、清掃作業の裏側を知ることができる体験型の展示を設ける。また、子どもから大人まで誰もが楽しめるよう、ゲーム感覚で学べる仕組みを取り入れる。さらに、公共スペース内に設置するゴミ箱を、ただの箱ではなく、適切なルールで捨てる、クーポンなど観光が楽しくなるような特典を発行するシステムを作ることで、利用する行為自体を魅力的にする。街中に設置するゴミ箱も同様にすることで、どこに捨てたらいいのか明確になる点でも有効である。このような工夫を通じて、観光客に対してただマナーを守るよう呼びかけるだけではなく、「自ら行動を変えたいくなる」環境を提供することができる。この取り組みは、京都の景観を守るだけでなく、「他者や環境を思いやる」「他国の文化を理解し対立を防ぐ」という価値を生み出し、観光客と地域住民の双方にとってより豊かな都市体験を創出するだろう。

38. ①どこで京都御苑、またその周辺②どんな人が大学生、子供、地域の住民、観光客③何をして過ごせるかマルシェやマーケット、親子でのイベントや地域住民が主導となったNPO ガイドなどで観光客に案内をする。子供向けの講習会やイベントごとをもうけ、親子参加のできる④そこにあるハードの工夫御苑の周辺にそういった人が集まれるような空間をもうけ、そこでイベントの準備や講習会などを開く。マーケットやマルシェを開く場合には、小さな屋台をもうけ物販などを行う。屋台なんかも大学生が主体となって設計し、子供と協力しながら作り上げていく。⑤そこから生まれる価値縦のつながりや横のつながりだけでなく、斜めの関係を構築していくことで子供の人脈や知見を広く持てるようにする。大学生も市や行政と携わる機会になり、主体として行動していくことで京都の市民と文化に触れ理解を深めることができる。観光客の多い御苑も住民が訪れるきっかけとなり、定年した人も携われるところで関わることで1人の時間を減らす。
39. ①場所下京区中野之町の亀山稲荷神社裏手にあるグラウンドを解放し、地域の人々や観光客が気軽に訪れる公共空間とする。②対象となる人々町の住民、観光客、小学生から大学生、大人、高齢者まで、幅広い世代と多様な背景を持つ人々を対象とする。③過ごし方この空間では、休憩、本を読む、お昼ご飯を食べる、井戸端会議、鬼ごっこやボール遊びなどの運動、さらには季節や期間ごとに行われる多様なイベントを楽しむことができる。例えば、スケートパーク、夏祭り、屋台、フリーマーケット、冬はスケートリンクなど、期間ごとにイベント施設を展開する。④ハード面での工夫・植栽と照明計画：緑にあふれ、明るく安全な雰囲気を作るために植栽を整備し、夜間も安心して過ごせる照明を設置する。・ベンチの設置：敷地内の至るところにベンチを配置し、人々がゆっくりと過ごせる空間を提供する。・開放的な入口：誰もが気軽に立ち寄れるよう、グラウンドの入口を広く開放的なデザインにする。⑤そこから生まれる価値この空間は、世代や国籍を超えた交流を生み出し、地域コミュニティの活性化を促します。子どもたちの遊び場、大人の憩いの場、高齢者の社交場、観光客の休憩場所といった多機能性が備わることで、多様なニーズに応える公共空間となります。さらに、季節ごとのイベントを通じて地域経済の活性化や文化交流が進み、京都らしい温かみと国際性を兼ね備えた新たなランドマークとなることを目指します。

40. 僕は 2050 年の京都には緑化に囲まれゆったりした空間を作りつつ、その中でもアートを重視した空間を作りたいと考えました。若い人に限らず高齢者まで幅広い空間を作ることによって利用者はなるべく限定したくないと考えています。京都は昔からの古き良き文化を重要視しながら生きている街なので、そこに未来で起こりうるであろう変化を融合させることによって魅力的なものが出来上がると思います。人の密集地である河原町などに作ることによって空間にも存在する意義が生まれると考えました。この空間が出来上がることによるメリットとして考えたのは、利用者の一部は上記にも上げたようにゆったりした時間を過ごせます。もう一部として考えていることは、融合させるものとして芸術(アート)を用いることによって感性がもとから豊か、もしくはそれによる印象を強く受けてアートに深くのめりこむ人々が生まれてくると思います。そうすれば、今後の日本はもっと鮮やかな空間が広がっていくのではないかと思います。
41. インバウンドが加速して外国人を含めた観光客のための交通や機能というものが多く増えていると思います。例えば、現在増えつつあるループでの移動はこれからも増加していき軽車両のみが通行できる道というものが多くなっていく、市バスがなくなりバス停がループの停留所になるなどを考えました。具体的な例を出していうと最近四条通の歩道が広がったように歩道の範囲が広がっていき最終的に歩行者天国のような状態になるなどを想像しました。それに伴いなくなった輸送経路などはドローンなどを用いて空中に導線が引かれたり観光客を含め多くの人が 5km 程の範囲の地上を移動し京都市の景色を見ながら観光し、それに伴った人の動きの分散交通の弁の改竄につながるのではとも考えます。また、リニア開通によって時間の短縮による京都とその他の地域の意識的な距離が大きく縮まるとも考えます。これにより京都市外のホテルを拠点に京都の観光をするという選択肢も増え、そのため京都市内の観光だけでなく市外の地域での観光や物流などに大きく影響を与えます。その際に市外のホテルと京都をつなぐ電車の本数を増やしさらに電車に京都の歴史の紹介や街並みをモチーフにしたものなどの特別車両を作ることによって京都全体の経済の回りが良くなると考えます。
42. 誰かと喋りたいわけでもない、誰かに喋りかけられるのも気疲れする、でも誰かといたい。そんな時に一人で来て、話しかけてはこないけど誰かしらがいるそんな公共空間をつくりたいです。場所としては四条や五条ら辺などのオフィス街から近くビジネスマンなどが多く利用する公園が良いです。ここでは、一人になりたい人が読書をしたり、ご飯を食べたり、勉強をしたり、ぼーとしたりして過ごします。そのために一人掛けの椅子とちょっとした机と雨を遮れるテントを等間隔に並べ、椅子に座った時に視線が合わない様に樹木を植えます。全体的に森っぽい感じにします。これでは安全性に問題があるため入り口にゲートを設置し、マイナンバーカードをかざすことで中に入れる様にします。2050 年はそれぐらい DX 化が進んでいると思います。こんな公園ができることで町内のイベントを大々的に開催して人が関わる機会を町として沢山つくっても、一人で許容してくれる幅の広いまちづくりをすることができます。

43. 2050年の京都に作りたい公共空間について述べていく。まず、場所は京都市内の河川敷という空間を利用したいと考える。今回は鴨川の河川敷とする。鴨川を選んだ理由として中心部に位置し公共交通機関が通っており、歴史的建造物などの美しい景観が残っており、国内外からの観光客も多いということが挙げられる。私は、そこで「多世代・多文化交流の広場」という公共空間を創りたいと考える。どのような人に向けての空間にするかという点については、子どもから高齢者、また、国内外からの観光客という幅広い層をターゲットにしたいと考えている。また、地域の福祉団体などと連携を図り、支援が必要な方の参加も可能にしていきたいと考える。次に、そこで具体的に何をして過ごすかという点については、河川敷という空間を活用した様々なイベントを開催したいと考える。例を挙げると、京都の地元の農産物や伝統的な文芸品を使ったマーケットを行うことや音楽、芸術の祭典、パフォーマンスなどを行っても良いと考える。また、子ども向けのアクティビティイベントの開催、簡易的な撤収可能なアスレティック設備の導入、高齢者向けの体操やヨガなどのイベントを行うのも良いと考える。次に、そこにあるハード面という点では、この広場には持続可能なデザインを採用するということが挙げられる。例を挙げると、太陽光発電を利用した照明、広場の座席などにはリサイクル素材や地域の企業に制作をお願いしたり、地域の技術を活用することも必要であると考えている。また、バリアフリー設計も取り入れていきたいと考える。最後に、そこから生まれる価値については、様々な価値観や文化を理解し合うことができ、また地域経済の活性化にも寄与し、観光客の訪問を通じて地元産業の振興が期待できる。さらに、環境に配慮した、持続可能な社会の実現に貢献することが期待できる。このように、「多世代・多文化交流の広場」は、京都の未来における新たな価値を創出し、人々の心をつなぐ場所となることができると考える。

44. 私は50年後の京都につくる公共空間は道路が良いと思う。現在の京都は観光客が多く地元の人是不便に感じる事がとても多い。通学や通勤だけでも観光客のせいで電車やバスが混雑し、道路は渋滞している。他府県の人に聞いても京都はそういう印象があるという。実際に京都に観光できた人は、観光する分には良いが住みたいとは思わないという人もそれなりにいる。それはこのような不便な場面を多く見ているからなのではないだろうか。そこで私は新たに道路を作る。しかし、新たな道路を作る敷地もないので今ある道路を改良する。観光する人だけが使う道とそれ以外の人を使う道を使い分けるのだ。市バスも観光用と通勤通学用とで使い分け通る道も帰る。その上で観光客は自家用車の利用を最大限控えてもらいもっと地元の人に住み心地の良い空間にしていくべきだと思う。京都は観光客に向けてのことにとても力を入れているが、その分、市民に対しての政策が疎かになっているように感じる。これらの政策をすることで私たちの生活の質を向上させるだけでなく、新たな人口の誘致に着手できるのではないだろうか。

45. ①堀川通、二条城前のタクシー乗り場②年齢に隔てなく地域住民や観光客③マルシェや蚤の市など、普段は昼寝④東本願寺の前のようにタイルや芝を地面に敷き、広々と使える場所にしたいと思います。また通りに接する場所であるので樹木が茂るようにするのではなく、視認性を高め空が広く見える場所にしようと考えています。また通りに面する場所には一人用のベンチの設置なども考えています。現在はタクシーターミナルとし

て使われておりますが、その機能を縮小し一部のエリアを使う想定です。⑤人々の交流拠点としての価値が生まれると思います。タクシーターミナルとしての機能を残しておくことで観光地としての移動のしやすさに加えて人の集まりやすい場所になると思います。東本願寺前では以前小さなモーターショーをしているところを見たことがあるので、そのような感じで共通の趣味を持つ人々が集まることのできるイベントを開くことで様々なつながりを生むことができると考えます。さらに京都の企業・職人さんが絡んでくるようなイベントであれば地域と結びつきより強い発展につながると考えます。

46. 出身地である宇治市で、街の住人や観光客が平安時代さながらの暮らしを体験できる場所を作りたいと思いました。宇治市には、平等院鳳凰堂や源氏物語ミュージアムなどの歴史にまつわる建物がいくつもあります。それを全面に押し出したいなと考えました。その場所では、基本服装は着物。建物も平安時代にあったようなデザインなものを。定期的に行事ごとを行う。映画村の延長線上のようなものを街全体に広げることにはできないかなと考えました。私は、歴史の出来事や歴史に対する意識が薄れつつあると感じることがあります。それを紡いでいく目的もあります。ここに足を運ぶ価値があるもの。ここでしか体験できないもの。楽しく学べる場所を作りたいです。白川郷が有名なのは街並みが特別感がある点が大きいのと考えています。この政策をすることにより歴史に興味をもつ人が増えたり、宇治がもっと価値のある観光地になるのではないかなと考えました。

47. 左京区の養正小学校の向かいにある飛鳥井児童公園。現在でも昼には小学生や家族連れが遊び、夜には学生が集まり談笑をする場所として使われている印象を持つ。その人たちが2050年になっても安心して、のびのびと遊びや、勉強、談笑、休憩などそれぞれの目的を100%満たせるように、多目的な空間をつくりたいと考える。そのためには、屋外と半屋外と屋内を織り交ぜた空間を提供すべきだと考えた。住宅街でかつ道路沿いなどといった安全面を考慮すると、子供が遊ぶ空間は「ほぼ外だけど中」という3/4屋外空間を提案。(ガラス張りにする壁と抜けている壁、仕切りを壁ではなくカーテンにするなど。素材強化されることを考慮して。)そして読書や勉強などする人は屋外にいるような屋内を提供する。(個別の空間は段差をつけたりカーテンで緩く仕切る。)談笑などは各々好きな場所で自由にしてもらおう。2050年には安全性が高まっていて、防犯対策も進化していると思うので、外に広がった、まるで駅のような多目的空間が広がっていくと考える。この施設を通して、遊びは公園、勉強は図書館、談笑はカフェなど、それぞれの目的でばらけてしまった人々を呼び寄せ、今まで関わることのなかった人達の出会いに場、交流の場となれば良いと考える。

48. 2050年の京都に望む公共空間は、歴史と現代が融合した「持続可能なコミュニティスペース」です。この空間は、祇園や嵐山といった観光名所から離れた地域、例えば、洛北エリアに設けたいと考えています。ここでは、地元住民や観光客、学生、アーティスト、様々なバックグラウンドを持つ人々が集まり、交流できる場所を提供したいです。この公共空間では、さまざまなアクティビティが行えるように設計します。例えば、地元の農産物を使った料理教室や、伝統工芸のワークショップ、アート展示などが行われ

るスペースを設けます。また、音楽演奏やパフォーマンスができる野外ステージも配置し、地域の人々が自らの才能を発表できる場を提供します。さらに、休憩やリラククスができる緑豊かな広場を設け、子供たちが遊べる遊具や、カフェも併設します。これにより、訪れる人々が自然と触れ合いながら多様な体験ができる空間を作ります。ハードの工夫としては、地元の伝統的な建材を活用しつつ、持続可能なエネルギーを利用した設計を行います。例えば、屋上には太陽光パネルを設置し、エネルギー自給率を高めるとともに、雨水を蓄え利用するシステムを導入します。また、バリアフリー設計を徹底し、すべての人が安心して利用できるように配慮します。周囲の自然環境とも調和するような植栽を行い、四季折々の美しい風景を楽しめるようにします。この公共空間から生まれる価値は、単なる物理的な場の提供にとどまりません。地域の人々が集まり、交流し、共に学び合うことで、コミュニティの絆が深まります。また、観光客もこの場所を訪れることで、京都の文化や伝統を肌で感じることができ、地域経済の活性化にも寄与します。さらに、持続可能な取り組みを通じて、環境意識も高まり、次世代に引き継ぐべき価値観を共有する場となるでしょう。2050年の京都において、このような公共空間が実現することで、人々が心地よく過ごし、互いに支え合い、共に成長できる社会を築いていきたいと考えています。

49. 京都は中心部にビルや寺院などの建築物が多く集まっており、現地の人ではなく観光客をターゲットとして運用された街のように感じます。また、緑地化があまり進んでいないなど、自然に触れる機会が少ない街のようにも感じられます。そこで今回は「持続可能な自然に触れる機会」をテーマに公共空間を考えます。今回参考にしたアイデアは、デンマークのコペンヒルという発電施設です。この施設は、1万平方メートルの発電施設の屋上をすべて芝生にし、冬季にはこれを人工スキー場として開放しているそうです。都心部にスキー場を作ることで、市民のレクリエーションの場をつくり、同時に大幅な都市緑化にも成功した例です。スキー場でなくても、公園や屋外レストランなど現地の人も通いたくなるようなアイデアがたくさんあると思います。芝の周囲には日本の木々や植物を植えることで、鳥や虫も生息することができる場所になります。一年を通して紅葉や花の移り変わりを見ることができると、さらに街が季節感のある美しいものに変化すると考えます。サステイナブルな街は環境だけでなく、利用する人の落ち着きや楽しさも持続させることができると思います。

50. 2050年の京都において、多様性と包摂性を重視した公共空間の整備が必要だと考えました。金閣寺や清水寺などの観光地では、バリアフリー化を進め、急な階段にはスロープやエレベーターを設置することで、高齢者や障がい者にもアクセスしやすくします。また、階段部分に手すりを設け、安全性を高めることも必要です。さらに、多文化共生を意識し、案内板を日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語など、多言語で表示することで、外国からの観光客にも配慮します。金閣寺や清水寺の入り口には、タッチパネル式の案内機を設置し、来訪者が自分の言語で情報を取得できるようにします。音声案内やQRコードを活用したスマホアプリで施設内のナビゲーションをサポートすることも効果的です。これらの取り組みによって、身体的な制約がある人や外国からの観光客が、平等にアクセスできる環境が整います。京都は、多様な人々が自由に利用できる

空間となり、地域全体の社会的包摂が進み、共生社会の実現が期待されます。これにより、京都がさらに魅力的で、誰もが快適に過ごせる場所となることができます。

51. 私が理想とする京都は「河原町歩行者天国化計画」です。これはつまりどういうことなのかという名前の通り河原町を歩行者天国にしてしまうというものです。私が京都で一人暮らしを始めてからの京都の印象は「歩く街」として自転車や自動車の規制が厳しい印象があります。河原町は交通量が多く人が多いのに交通量も多いと言ったことが感じられます。この問題を解決するために私は三条通から四条通までの区間を歩行者天国としたいと考えました。具体的には、24時間ずっと歩行者天国というわけではなく早朝は車の通行を許可し、飲食店への納品を行うなどの時間を設ければいいと考えています。歩行者天国にするメリット・「歩く街」という言葉の拡大・人が多くなることのストレスの軽減・パーソナルスペースが広がることで何かイベントが開けるオープンスペースとなるデメリット・バスなどのルートが限られる・交通の便が心配・河原町に人が集中してしまう可能性があるこれらの問題点はあるがメリットの方が私は大きいと感じたので「河原町歩行者天国化計画」を提案します。考えたこととして今まで車道だったところに出店などを出すことで、賑わいがでて、幕屋根にすることで、明かりを取り入れつつも熱中症対策にもなるとかんがえた。

52. 2050年の京都に私がつくりたい公共空間は、「自然と文化の融合を体感できる多世代交流の庭園」です。以下に具体的に説明します。①どこで東山のふもとに位置する地域を選びます。このエリアは既に多くの観光名所があり、京都らしい景観を活かした公共空間をつくることで、地域住民と観光客の双方に新しい体験を提供できます。②どんな人が地域住民から観光客、子どもから高齢者まで、幅広い層が訪れることを想定しています。特に、異なる世代間での交流や、外国人観光客が日本文化をより深く体験できるような場にしたいと考えています。③何をして過ごせるかここでは、庭園の手入れや伝統工芸のワークショップ、茶道体験などの文化活動が行えます。さらに、自然と触れ合えるようなスペースでは、植物の観察や小川での遊びも楽しめる設計にします。また、静かに読書をするエリアや、リラクゼーション用のヨガスペースも設置し、多様な利用方法を可能にします。④そこにあるハードの工夫建築デザインには安藤忠雄の「住吉の長屋」のようなシンプルさを取り入れ、自然光や水の流れを活かした設計を行います。建物の素材には、地域の竹や木材を使用し、持続可能性を重視します。庭園には、日本庭園の要素を取り入れつつ、自由な動線を確保し、訪れる人々が心地よく移動できるように設計します。また、京都の伝統技術である京提灯を活かした夜間照明を導入し、夜の訪問者にも魅力的な空間を提供します。⑤そこから生まれる価値この空間を通じて、地域の文化的価値が再発見され、世代間交流や国際交流が促進されます。また、自然と共生するライフスタイルや環境への意識が高まることで、持続可能な未来を考える契機となるでしょう。この庭園は、単なる観光地ではなく、訪れる人々が自分自身と向き合い、学び、つながる場所として、京都の新たなシンボルとなる可能性を秘めています。このような公共空間は、京都の魅力を未来へとつなげるための一つの形だと考えます。

53. 2050年京都:観光客と地元住民が共生するアパート観光客の増加による地元住民の生活空間圧迫を緩和するため、共生型アパートを提案します。このデザインは従来の空間分割を打ち破り、共有と柔軟な利用を重視しています。建物は浸透型デザインを採用し、1階には観光客向けのオープンスペース(市場や文化体験ゾーン)を設置。中層階には住民専用の共有庭園や交流スペースがあり、適度な交流を可能にします。上層階は住民のプライベート空間とし、生活のプライバシーを保護します。さらに、時間共有システムを導入し、昼は観光客向けの体験スペース、夜は住民の社交スペースへと機能を切り替えます。また、建物には緑の緩衝帯や移行スペース(小さな庭や垂直植栽など)を配置し、住民と観光客の交流の場とします。柔軟な空間設計には可動式の間仕切りや折りたたみ家具を採用し、用途に応じて機能を変更できます。さらに、地域文化体験を建物内に組み込み、観光客がワークショップや市場に参加することで、地元生活への理解と尊重を促します。

54. 2050年の京都:伝統と未来が融合する、災害に強いコミュニティ空間京都市内の古い公園や再利用された工場跡地に、市民の生活に根ざし、災害時には避難所としても機能する多目的公共空間を創出したいと考えています。この空間は、伝統的な京都の美しさを守りつつ、現代のテクノロジーを取り入れた、持続可能で安全な場所を目指します。地上部分は、木や竹といった自然素材とスマートな建築技術を融合させ、美しい庭園や多目的ホール、コミュニティカフェなどを設けます。一方、地下部分は、大地震などの災害時に多くの人々が安全に避難できるよう、頑丈な構造と十分なスペースを確保し、水や食料、医療設備などを完備します。最先端の技術を活用することで、高齢者の方々も安心して避難できるよう、バリアフリー設計やロボットによる支援なども検討しています。この空間は、単なる避難所ではなく、人々が集い、交流し、共に未来を築くための場所となるでしょう。

55. 2050年の京都は伝統と現代が融合する都市で、日本の高齢化に伴い高齢者が多く居住するが、また日本を代表する観光地として外国人観光客、そして学生たちの都市として若い学生たちも多く訪れる独特な構成の都市であると考えられる。このような特徴を持った京都に私が作りたい公共空間をお互いに違う背景を持っている多様な人々が一緒にコミュニケーションをして、お互いを理解できるような空間を作りたいと思う。位置は京都を代表する鴨川の川辺で、地域住民と学生たち、外国人観光客の皆が多く訪れる空間であるためだ。現在も多くの背景の人々が訪れる空間だが、その空間でコミュニケーションや新しい出会いはあまり起こらないと思う。こうした部分をハード的な部分とソフト的な部分で工夫して解決したいと思う。一つ目は川辺にベンチを配置することだ。ベンチは利用者の経済的背景、世代的背景に関係なく、誰でも利用できる施設である。ベンチがなければ誰かは100円の安いカフェを利用し、誰かは高い高級カフェを利用するなど、利用する空間が変わることになる。ベンチは利用者の背景と関係なく誰でも利用できる施設であり、ベンチは多ければ多いほど良い。これを通じて、すべての人が共通の経験、共通の思い出を作ることができる効果を期待する。二つ目は川辺で屋台を運営できるようにすることだ。屋台が入ってくると観光客、若い学生、会社員、高齢者など多様な背景の人々が集まることになると思う。これにより、多様な背景を持つ

人々が一つの場所に集まり、その場所で自然にコミュニケーションが起きる効果を期待する。そのためには、京都市の条例の改正や行政的手続きなどが必要となると思う。このような方法を通じて、私は京都が多様な背景を持つ人々が一つの場所に集まり、お互いを理解できる都市になることを期待する。